Trainee therapists' experience of case conference
2016 Vol.18 p.57 - p.66

心理臨床家訓練生の
ケースカンファレンス体験に関する研究

早川　歩　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科

要約

心理臨床家訓練として重要なものの一つに，ケースカンファレンス（以下，カンファレンスと表記）がある。しかし，訓練としてカンファレンスに参加する訓練生がカンファレンスをどのように体験しているかの研究は十分に行われていない。したがって本研究では，心理臨床家の訓練生がカンファレンスをどのように体験しているのかを明らかにすることを目的として，訓練課程修了後 1～2 年目の心理臨床家に対して半構造化面接を行った。KJ 法による分析の結果，大きく分けて，【臨床的な見方・考え方の蓄積】の機会になる，【ケースに他者の視点を入れることによる気づき】が得られる，【取り組みや考えの評価をされる】場である，【発表者とケースを尊重し，応援する姿勢が発表者を支える】場であるという 4 つの意味合いがあり，自信や経験の少なさといった訓練生の特徴が，体験の背景にある要因の一つであることが明らかになった。

キー・ワード：心理臨床家訓練生，ケースカンファレンス

Ⅰ　問題と目的

1. はじめに

近年，人々の心の健康への関心が高まっており，カウンセラーやセラピスト，臨床心理士といった，心理臨床家への需要は増加している（以下，カウンセラー，セラピスト，臨床心理士といった心の専門家の総称として，“心理臨床家”という言葉を用いる）。心理臨床家が専門家としての責務を果たす上では，適切な訓練を行い，心理臨床家の質を高めることが重要であるだろう。したがって，心理臨床の研究として，心理学の基礎研究や，事例研究，心理療法の効果研究に加えて，心理臨床家の訓練に関する研究も同様に行われることが必要であると言える。

2. ケースカンファレンス

心理臨床家訓練の場の一つに，ケースカンファレンス（以下，カンファレンスと表記する）がある。カンファレンスは，“精神病院，精神科病院，児童相談所，養護施設，大学の心理相談室などで関係するスタッフ全員が定期的に集まり，入院・入所中の患者や入所者，受理した事例，心理療法や心理検査を実施している事例，終結した事例，対応が困難な事例などについて報告し，治療，心理療法，処遇などの方針といったことについて検討するもの”（一丸，2003）である。心理臨床家の資格の一つである「臨床心理士」の資格認定協会（公益財団法人 日本臨床心理士資格認定協会）が定める，臨床心理士養成の指定大学院においては，心理面接や心理査定を行った上で，カンファレンスやスーパービジョン（以下，SV と表記する）を受けることが求められている（公益財団法人日

本臨床心理士資格認定協会，2013）。しかし鑪（1994）は，日本においてはSVや教育分析を受ける機会を得ることは難しく，多くの心理臨床家はカンファレンスにおいて訓練の機会を得ているのではないかと述べている。カンファレンスは，日本における心理臨床家の訓練方法として，重要なものの一つだと言えるだろう。

3. ケースカンファレンスに関する文献

1）熟練者・指導者から論じられるケースカンファレンス

カンファレンスはどのような目的で実施され，どのような意義があると考えられ，どのようなカンファレンスが望ましいとされているのか。以上を明らかにするため，心理臨床の熟練者，及び指導者の視点でカンファレンスについて論じられているいくつかの文献を概観した。その結果，次の5点が共通する点であると考えられる。

(a)　報告された事例の理解を深めること。事例を相対化，客観化し，距離を置いて見ることが出来たり，参加者からのコメントを聞くことで，新たな理解を得たり，適切な見立てを立てたりする（吉良，1998；一丸，2003；岩間，2005；下山，2013）。

(b)　報告事例を超えて，他の事例にも応用できるような知識，視点を得ること（岡田，1992；一丸，2003；岩間，2005；下山，2013）。

(c)　参加者が，事例報告者の実践を体験することができること。このことは，事例検討において共感的な理解を行う上で必要なことである。また，他者の取り組みを自身の参考にするという意義もある（岡田，1992；岩間，2005）。

(d)　心理臨床家としての自分自身の理解を深めること（岡田，1992；岩間，2005）。

(e)　他のスタッフから心理的にサポートされる場になること（一丸，2003；岩間，2005）。

その他，個別に論じられている目的・意義としては，以下のものが挙げられる。

・治療者の変容の場になること（岡田，1992）
・所属する心理相談室の伝統，風土，臨床的雰囲気に触れることができること（一丸，2003）
・実践を評価すること（岩間，2005）
・連携のための援助観や援助方針を形成すること（岩間，2005）
・組織を育てること（岩間，2005）

カンファレンスは，報告された事例の検討を行うことで見立てや処遇を向上させるのみではなく，そこに参加するすべての者の臨床知識及び能力の向上に寄与するものであると考えられている。また，各人の経験や所属によって，カンファレンスの目的とするものには差異があり，それに伴ってカンファレンスから得られると想定される意義の認識にもある程度違いが生じていると言える。

2）心理臨床家訓練生のケースカンファレンス体験に関する先行研究

では，訓練としてカンファレンスに参加する訓練生は，実際にカンファレンスをどのように体験しているのか。訓練生を対象として行われた研究には，牧他（2009）によるものと，富永（2012）によるものがある。いずれも，臨床心理学を専攻している大学院生を対象として，半構造化面接を実施し，体験モデルを作成している。カンファレンスの理想像を論じるのみではなく，訓練生の実際の体験を明らかにすることは，カンファレンスの実態を把握し，より意義のあるカンファレンスを考え，行っていく上で非常に意義深い研究であると言える。

しかし，いずれの研究も対象者が2〜3名と少数である。また，一校の大学院を対象としてインタビューを行っているため，その経験が大学院固有のものであるのか，広く訓練生に共通する経験であるのか判断することが難しい。さらに，体験のプロセスは明らかにされているが，訓練生がカンファレンスにどのような意義を感じているかは明らかにされていない。総じて，心理臨床家訓練生が体験するカンファレンスに関する研究の知見は

十分に蓄積されているとは言えないだろう。

4. 本研究の目的

本研究では，心理臨床家訓練生はカンファレンスにおいてどのようなことを感じ，どのような学びを得ているのか，その体験をもとに，訓練生にとってのカンファレンスの意義を明らかにすることを目的とした。先行研究の不足点をもとに，対象者の所属の幅を広げることで，各機関の持つ個別的な環境の影響を減らし，訓練生に共通して見られるカンファレンスの体験と，その意義について明らかにすることを目指した。

Ⅱ　方法

1. 予備調査

本調査で用いるインタビュー項目の検討を目的として，予備調査を実施した。

1）調査協力者

本研究では，心理臨床家のうち，「臨床心理士」の訓練課程を経た心理臨床家を対象とした。臨床心理士は心理臨床家の資格の一つであり，資格取得にあたっては，資格認定協会（公益財団法人 日本臨床心理士資格認定協会）が定める指定大学院を修了することが必要な条件の一つとされている。いずれの指定大学院に所属していても，資格認定協会が定める一定のカリキュラムを同様に修めることが求められており，その一環として，心理面接や心理査定を行った上でケースカンファレンスや SV を受けることが必要である。いずれの大学院を対象としても，カンファレンスが行われていると考えられるため，本研究の対象として適切であると判断した。

予備調査では，関東圏内にある臨床心理士指定大学院（第一種）を修了して 1 年目の方 2 名を対象とした。修了 1 年目の方を対象としたのは次に挙げる 2 つの理由からである。第 1 に，カンファレンスの体験を明らかにする基礎研究として，ある一定の時期に特化した体験ではなく，訓練課程における体験全体を明らかにする必要があると考えられること。第 2 に，訓練課程を修了し，その後の臨床経験が長くなると，訓練期間の記憶が薄れ，修了後の経験が色濃くなってしまうと考えられるためである。

予備調査の協力者 2 名は，いずれも X 大学院修了後 1 年目，性別は女性，年齢は 20 代であった。

2）手続き

2015 年 5 月から 6 月に，半構造化面接によるインタビューを実施した。面接所要時間は 1 時間～1 時間半であった。面接は，お茶の水女子大学キャンパス，あるいは協力者の希望場所にて行った。面接実施前に，研究の目的及び倫理的配慮に関する説明を行い，調査協力の同意を得た。

予備調査を受けて，インタビューガイドの改定を 2 回行った。

2. 本調査

1）調査協力者

関東圏内にある臨床心理士指定大学院（第一種）を修了して 1～2 年目の方 10 名を対象とした。協力者として，臨床心理士指定大学院修了後 1～2 年目の方を対象とした根拠は，予備調査に準ずる。

調査は 5 つの大学院を対象とし，内訳は X 大学院 2 名，Y 大学院 3 名，Z 大学院 3 名，V 大学院 1 名，W 大学院 1 名であった。性別は女性 8 名，男性 2 名であり，年齢は 20～30 代であった。

2）手続き

2015 年 8 月から 10 月にかけて実施した。本調査の手続きは，予備調査に準ずる。

3. 分析方法

本研究では，分析方法として KJ 法（川喜田，1967 ; 1970）を用いた。本研究の目的は，訓練生の広範な体験から共通する点を抽出し，整理することであった。KJ 法は，まとまりのない多くの情報から構造や統合を見出していくために使用され

る方法である（川喜田，1967）。したがって，本研究の分析方法として適切であると判断した。

個々のインタビューデータより，カンファレンスの体験について，次の 3 点に着目してラベルの抽出を行った。(1) カンファレンスがどのような場であったか。(2) カンファレンスでどのようなことを学び，得られたか。(3) カンファレンスで感じ，考えたこと。本研究では体験のプロセスを明らかにすることは目的としていないため，ラベル抽出の際，2 年間のカンファレンスにおける訓練生の変化にまつわる点への着目は行っていない。

ラベル抽出後，1 回目のグループ編成を行った。1 回目のグループ編成では，同様の経験であると思われるラベルを集め，小カテゴリーを生成した。なお，1 回目のグループ編成において 2 名以上から成るかたまりを小カテゴリーとし，以降のグループ編成の分析対象とした。これは，本研究の目的が，訓練生に共通してみられる体験を明らかにすることであるためである。

1 回目のグループ編成終了後，2 回目のグループ編成を行った。親近性のある小カテゴリーを集め，中カテゴリーを生成した。その後同様に，3 回目のグループ編成を行い，中カテゴリーから大カテゴリーを生成した。

グループ編成後，川喜田 (1970) の方法に則り，A 型図解，B 型文章化を行った。

Ⅲ　結果

分析の結果，223 枚のラベルから，1 回目のグループ編成を経て小カテゴリーが 42 個，2 回目のグループ編成を経て中カテゴリーが 13 個，3 回目のグループ編成を経て大カテゴリーが 4 個生成された。なお，本研究は，共通する体験を抽出することを目的としているため，ラベルはカテゴリーに属するもののみ計上し，カテゴリーに属さないもの（個人の体験）は計上していない。

以降，小カテゴリー名は［　］，中カテゴリー名は＜　＞，大カテゴリー名は【　】で表す。

1. A 型図解の結果

まず，A 型図解の結果を図 1 に示す。また，中カテゴリー以上を抜粋し，カテゴリー間の関係性を表したものを，図 2 に示す。

2. B 型文章化の結果

次に，B 型文章化の結果を以下に示す。

心理臨床家訓練生（以下，訓練生）にとってのカンファレンスには，4 つの意味合いがある。第 1 に，【臨床的な見方・考え方の蓄積】の機会になること。第 2 に，【ケースに他者の視点を入れることによる気づき】が得られること。第 3 に，【取り組みや考えの評価をされる】場であること。第 4 に，【発表者とケースを尊重し，応援する姿勢が発表者を支える】場であること。

第 1 に得られるものは，発表者・参加者という参加形態に関わらず，カンファレンスに参加するすべての訓練生にとってのものである。訓練生は，定期的に開催されるカンファレンスに参加することで，＜多くの事例に触れることができる＞。多くの事例に触れることは，担当ケースが少ない訓練生にとって，事例のイメージを広げることに加えて，それ自体が臨床経験の積み重ねとなる。また，そのような数多くのケースに対する検討，その中でも特に教員のコメントを聞く事で＜臨床知識を実際のケースから学ぶ＞ことができる。それと同時に，ケースを見るための＜臨床的な視野を広げる＞こともできる。このように臨床的な見方・考え方をインプットして蓄積するのみならず，他者のケースについて聞きながら，自分なりに見立てと方針，関わり方について考えたり，発言をすることで，カンファレンスは＜臨床的に考えたりアウトプットをする経験を積む＞場にもなる。ただし，カンファレンスにおいて＜発言は空気を読みながら模索＞して行われている。自由な議論の場であるというよりは，カンファレンスの雰囲気を感じ取りながら，発言をしたりしなかったり，時にカンファレンスが活発になるように工夫して

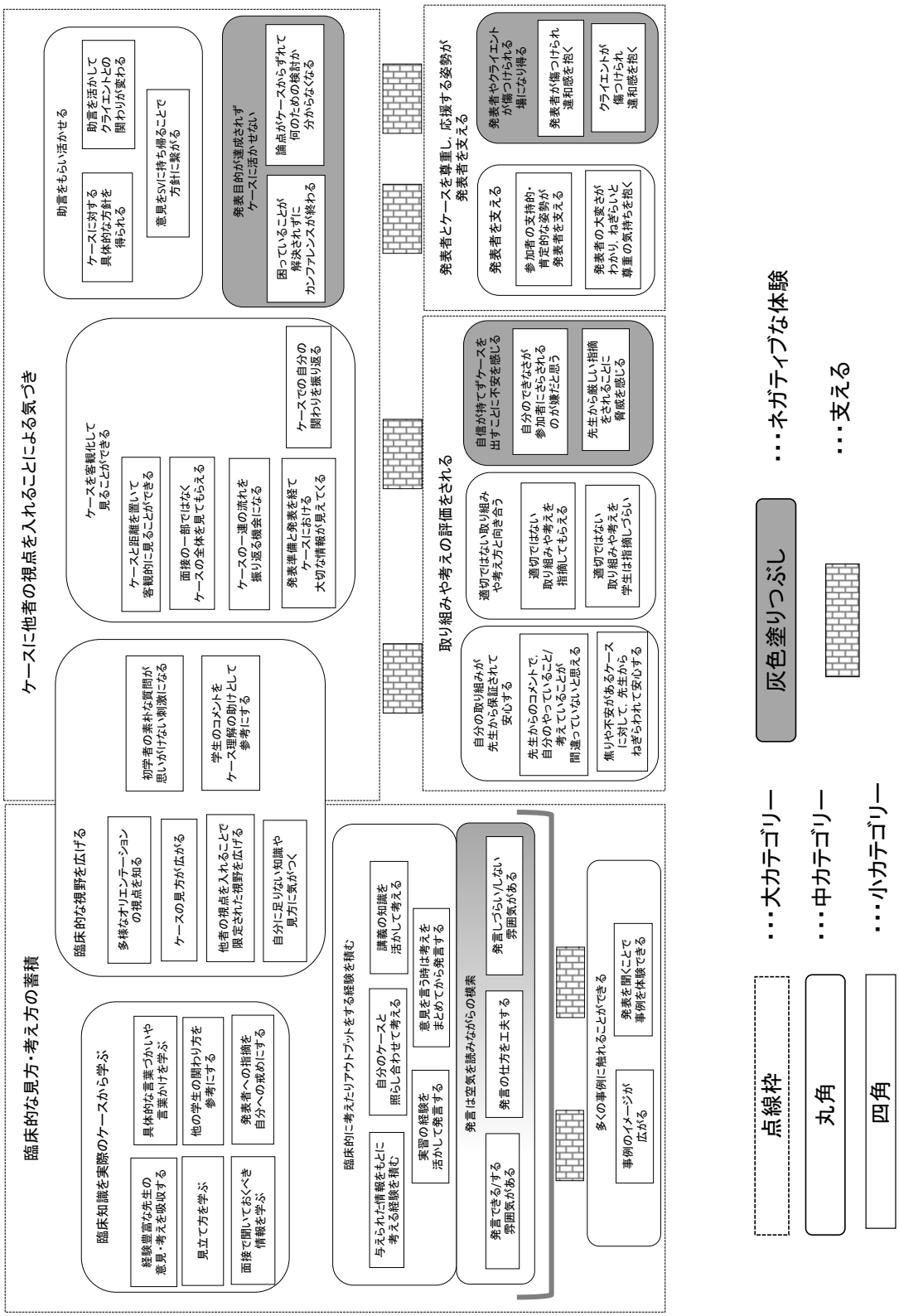

図１　心理臨床家訓練生のケースカンファレンス体験（小カテゴリー以上）

発言をしてみる場，という意味合いが大きい。

第 2 に得られるものは，主にケースの発表者にとってのものである。自分の担当ケースをカンファレンスに出して他者の意見をもらうことで，担当ケースを見る上での＜臨床的な視野を広げる＞ことができる。さらに，カンファレンスへ出すための準備から発表に至るまで，＜ケースを客観化して見ることができる＞ことで，ケースに対する新たな気づきが得られる。また，＜助言をもらい活かせる＞ことでカンファレンスの意義を感じることができたり，＜発表目的が達成されずケースに活かせない＞ために，ケースを出した意義を感じられなかったりすることがある。ケースをカンファレンスに出すにあたっては，具体的な助言を貰うことを求めている場合も多い。

そして，第 2 の意義を十分に感じられるためには，“カンファレンスがどのような場であると感じられているか”という観点が重要である。心理臨床家訓練生にとってカンファレンスは，【取り組みや考えの評価をされる】場であり，【発表者とケースを尊重し，応援する姿勢が発表者を支える】場でもある。“評価”の場であることは，ポジティブにはたらくこともあれば，ネガティブにはたらくこともある。評価をされる場であることを意識し，＜自信が持てずケースを出すことに不安を感じる＞こともあれば，ポジティブな評価をされて＜自分の取り組みが先生から保証され安心する＞こともある。実際に，＜適切ではない取り組みや考え方＞など，指摘が必要な部分が見られることもあり，指摘される側，或いは指摘したい側として向き合う機会にもなる。また，カンファレンスの場の雰囲気として，＜発表者を支える＞ような雰囲気のこともあるが，時には心無いコメントで＜発表者やクライエントが傷つけられる場になり得る＞。カンファレンスの“評価”と“支え”の機能が，ケース検討を土台として支えている。

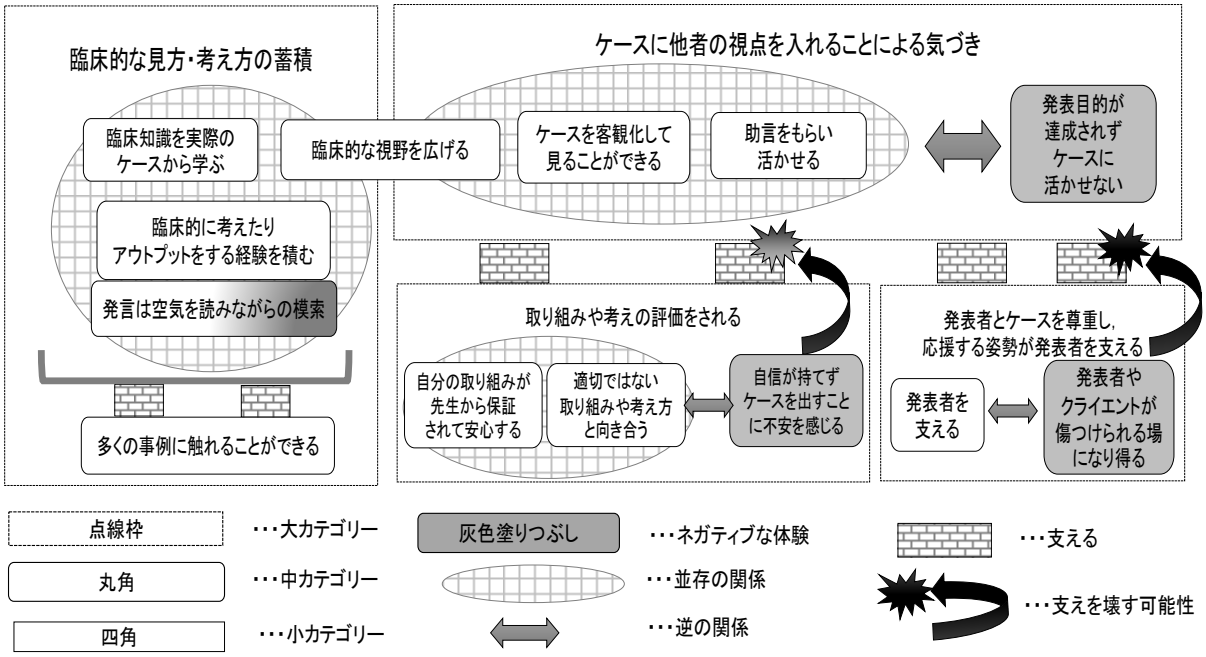

図 2　心理臨床家訓練生のケースカンファレンス体験（中カテゴリー以上）

Ⅳ　考察

本研究の結果，訓練生にとってのカンファレンス体験が明らかになった。結果に見られる訓練生のカンファレンスの体験の特徴をまとめ，訓練生にとってのカンファレンスがどのような場であるかという性質，そして，訓練生がカンファレンスからより多くの学びを得るために必要なことという二つの観点から考察を行う。

1. 訓練生のカンファレンスの体験の特徴

訓練生のカンファレンスの体験には，次の 5 つの特徴があると考えられる。

1）臨床的な知識，見方，考え方などのインプットの機会として重要であること

訓練生にとってカンファレンスは，臨床的な知識，見方，考え方をインプットする場としての意義が大きいことが明らかになった。この結果は，指導者，熟練者の想定するカンファレンスの意義と一致する（岩間，2005；一丸，2003）。カンファレンスで得られる知識は，理論のように抽象的なものではなく，熟練のセラピストの体験でもなく，自分と同じ訓練課程にいる学生が担当しているケースに対する意見から得られるものである。そのため，より身近で，現実的で，日々の臨床活動に活かしやすい知識であるのかもしれない。

2）学んだことのアウトプットの場としての雰囲気は多様であるが，発言のしやすさに関わらず得られるものがあること

カンファレンスでの学生の発言の程度は，そのカンファレンスの雰囲気や方針によるところが大きいと考えられる。しかし，［与えられた情報をもとに考える経験を積む］という小カテゴリーに代表されるように，必ずしも発言をしなくとも，自分の中で考えたり，考えをまとめるという作業を重ねること自体が，訓練の一つとして十分に意味のある作業であることが示唆された。

3）他者からの評価を気にし，指導者を頼りにする場であること

吉良（1998）は，“ケースに関わっているのは自分であるという感覚”を強めるためには，評価を気にしたり，コメンテーターの判断を求めたり，カンファレンスの言葉をケースに持ち帰ることは望ましくないと述べている。しかし本研究からは，訓練生は評価をされる場としてカンファレンスを捉え，コメンテーターやスーパーバイザーの判断を求め，得られた意見をそのままケースに取り入れることもある，ということが明らかになった。これらのことが生じる背景には，訓練生の経験や自信のなさがあると考えられる。［先生からのコメントで，自分のやっていること／考えていることが間違っていないと思える］という小カテゴリーからも窺えるように，大抵の訓練生はケースを持った経験が少なく，試行錯誤でケースに取り組んでいるため，自分の取り組みが間違っていないかという不安を抱いている。つまり，訓練過程は，“ケースに関わっているのは自分であるという感覚”を得るために，評価を気にしたり，コメンテーターの意見を頼りにする段階であると考えられる。

4）発表者が傷つきを感じやすい場であること

カンファレンスは，訓練生にとって評価をされる場になり得るという結果が得られ，この結果は指導者・熟練者の論と一致するものであった（岩間，2005）。しかし，訓練生にとってのカンファレンスにおける評価は，できなさが晒されることが不安であるなど，“自分自身”への評価という側面を有していることが窺われた。つまり，“実践”と“自分自身”が切り離されていない状態であり，発表に対して指摘をされることが，“自分自身”を脅かし，傷つけることになりやすいと考えられる。

5）知識・経験の少なさ，自信のなさがカンファレンスでの体験に影響していること

上記 4 つの特徴の背景として，訓練生が心理臨床家としての知識や経験が少なく，自信を持てていないことが影響していることが共通して窺われ

た。このことから，本研究で明らかになったカンファレンスの体験は，訓練機関“における”カンファレンスの体験ではなく，“訓練生”の，特に“訓練初期”に経験するカンファレンスの特徴であると言えるかもしれない。

2. 訓練生のカンファレンスの性質

ここまで，結果から見られる訓練生のカンファレンスの体験の特徴をまとめた。これらの特徴から，訓練生にとってのカンファレンスは，ケースカンファレンスよりも“事例検討会”としての色合いが強く，また，“隠れ学習”の場としての機能が強いと考えられる。

1）“事例検討会”としての性質の強さ

議論が生じにくく，助言を求める傾向が強いことから，訓練生のカンファレンスは，“ケースカンファレンス”というよりも“事例検討会”に近いものであると言えるのではないだろうか。鑪（1994）は，日本で一般的に事例検討会といわれるものは，経験のある臨床家が指導者としており，事例全体を通して学んだことを討議するのではなく，事例提供者は事例についての技術的なアドバイスを期待していると述べている。カンファレンスは，スタッフが対等な立場でケースについて話し合うという意味合いを強く含んでいる。訓練生のカンファレンスを“ケースカンファレンス”として捉えると，議論の少なさや，対等な話し合いの難しさが不足点に見えるが，“事例検討会”としてみると，十分に目的を果たしていると言えるかもしれない。

2）「隠れ学習」の場

カンファレンスで行われることは，事例の検討である。しかしカンファレンスでの発言に関して，大学院によっては，発言をする人には偏りがあったり，学生はほとんど発言をしない場合も見受けられた。学生の発言については，そのカンファレンスを構成する人々の雰囲気や方針によるところが大きいことが明らかになった。

小谷（2004）はグループ SV について論じる中で，グループにはメンバーを隠す機能があり，グループ SV は自身の安全を確保しながら SV 体験を豊かにする“隠れ学習”の機会となると述べている。グループ SV とカンファレンスは異なる場であるが，グループで行われる点は共通している。カンファレンスにも参加者個人を隠す機能が備わっており，自信のない訓練生に対して，安心して知識を学んだり，ケースについて考えることができる機会を提供していると考えられる。

3. カンファレンスから更なる学びを得るために

本研究の結果から，訓練生が訓練としてのカンファレンスからより多くの学びを得るために意識できると良いと思われる点について，次の 3 点が考えられる。

1）カンファレンスの振り返りを行う

カンファレンスで十分に学びを得るためには，支えの機能が重要であることが明らかになった。訓練生は一度カンファレンスでの発表を経験することで，発表者の苦労や大変さがわかり，ねぎらいの気持ちが生じることが多いようである。支える場としてのカンファレンスという意識を強めるためには，ケースの発表後に，担当のスーパーバイザーなどの第三者と共に，ケースに関する振り返りに加えて，カンファレンスでのやりとりに関する振り返りを行うことが有用だと言えるだろう。

2）意見交換の方法を吸収する

訓練生のカンファレンスでは，議論が活発に行われないことも多いことが明らかになった。また，インタビューの中で，「指摘をする上でどのように伝えたら良いか悩む」という気持ちも語られた。したがって，臨床的な知識に加えて，意見交換の方法もともに学ぶことが必要であると言える。他者の発言やスーパーバイザーのコメントの仕方，フォローの方法を見て，集団の意見のやりとりの

仕方についても意識して吸収したり，考えたりすることで，カンファレンスに主体的に参加することができ，ひいてはカンファレンスからより多くの学びを得ることができると考えられる。

3）“指摘”について考える

鑪（1994）は，事例検討会における事例提出者が“失敗から学ぶ”こと，“批判から学ぶ”ことの重要性を述べ，“失敗から学ぶ”経験は初心者の時にしておくことが望ましいとしている。失敗から学ぶことをせずに経験者になると，失敗への防衛が強まってしまうためである。このように，うまくいかなかった事についてカンファレンスで指摘をもらうことは，多くの意義があることである。しかし，そのことに対して訓練生が不安や脅威を感じていることもまた事実であることが明らかになった。カンファレンスでの発表が極端な傷つき体験の場とならないために，カンファレンスの“支え”の機能が十分に働いていることが必要であることは結果において明らかになった。それに加えて，訓練生が“指摘”について考えることも必要であると考える。“自分自身”への指摘ではなく“実践”に対する指摘であるという意識を持ったり，過度に指摘を恐れる自分自身の内的な要因について考えるなど，指摘に対する耐性を高めるための取り組みを行うことで，カンファレンスがより学びの多い場と感じることができると考えられる。

4. 本研究の限界と展望

本研究では，訓練課程の各時期でのカンファレンスの体験については明らかにできていない。牧他（2009），富永（2012）の研究からは，カンファレンスの体験は変化のプロセスがあることが明らかになっている。今後は，訓練生を対象として調査を行うことで，訓練課程の各時期でのカンファンレンスの意義を明らかにすることができるだろう。その結果，より豊かな学びを得るための示唆を得られることが望まれる。

また，各カンファレンスに対して，指導者が想定する目的や意義を明らかにした上で，訓練生のカンファレンスの体験を聞くことで，本来の目的が達成されるための要因や，達成されない原因など，カンファレンス内で生じていることがより詳細に明らかにできるだろう。

さらに，訓練課程のカンファレンスを経て，臨床経験を重ねるにつれて，どのようにカンファレンスの体験が変化するかを明らかにすることで，訓練課程のカンファレンスの意義がより明確になるだろう。

＜付記＞本研究にご協力くださった皆さま，ご指導いただいたお茶の水女子大学大学院 藤田宗和教授，貴重なご意見をくださった皆さまに，心より御礼申し上げます。

文献

一丸 藤太郎（2003）. 臨床心理実習 1　スーパーヴィジョン　下山 晴彦（編）　臨床心理学全書 4　臨床心理実習論（pp. 342-344）　誠信書房

岩間 信之（2005）. 援助を深める事例研究の方法［第 2 版］―対人援助のためのケースカンファレンス―　ミネルヴァ書房

川喜田 二郎（1967）. 発想法　中央公論社

川喜田 二郎（1970）. 続・発想法　中央公論社

吉良 安之（1998）. ケースカンファレンスや学会での事例発表をめぐって　心理臨床, **11**, 107-111.

公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会（2013）. 大学院指定申請に関する参考資料（平成 25 年度版）Retrieved from http://fjcbcp.or.jp/jigyounaiyou/jigyou-2/（2015 年 12 月 30 日）

小谷 英文（2004）. グループ・スーパービジョンの意義　臨床心理学, **4**, 97-504.

牧 剛史・荻野 昌秀・井上 瑠美・草野 加奈未・清水 寛子・若林 芽久美・渡部 ともみ（2009）. 臨床心理学専攻大学院生はケースカンファレンスをどのように体験しているのか―M-GTA によるモデル化の試み―　佛教大学臨床心理学研究紀要, **5**, 5-72.

岡田 康伸 (1992). 京大のカンファレンスから　京都大学臨床心理事例研究, **9**, 2-36.

下山 晴彦 (2013). ケースカンファレンスの目的と方法　精神療法, **9**, 643-648.

鑪 幹八郎 (1994). 心理臨床家の訓練　河合 隼雄 (監修)　臨床心理学 4 実践と教育訓練 (pp. 245-269) 創元社

富永 幹人 (2012). 大学院におけるケース・カンファレンスを通しての学び　臨床心理学 : 福岡女学院大学大学院紀要, **9**, 31-38.